

「合唱の長町」の神髄を

今週は学年リハーサル そして金曜日は本番です

合唱コンクールが今週に迫りました。各学年、各学級で工夫した練習を重ね、いよいよ明日が本番前のリハーサル(学校公開日)となります。本番数日前の体育館で実施するリハーサルでは、各学級の現在の仕上がり具合が理解できて、他のクラスの合唱を聴いて危機感を感じたり、逆に自分のクラスの良さを感じたりと、残り数日で取り組むべき課題も明らかになり、モチベーションもさらさら変わってきます。それほど中学校でも同様で、ここから合唱が大きく変わる場合が多く、リハーサル当日までと本番当日の違いも際立ち、若い世代の可能性を実感します。

保護者の皆様にも、できれば両日ともにご参観いただき、生徒達の努力の証を実感いただければ幸いです。

「命」

宮越由貴奈

命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も月日がたってやっと
神様から与えられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも「命なんかいらない」と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命をつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから、私は命が疲れたと言うまで
せいっぱい生きよう

さて、今週金曜日に迫った合唱コンクールですが、さらにクラス合唱をよりよきものにするために、もう1度、学級の合唱曲の歌詞の意味をよく理解して、イメージを共有できれば、さらにより高みに達するのではないかと考えています。

近年の日本全国の合唱コンクールでは、中堅学年でよく歌われる曲があります。長町中の2年生でも歌われていますが、「命ある限り」という曲があります。この曲は、重い病気で長く入院していた宮越由貴奈さんという実在したお子さんが、入院先で電池を使った理科の授業の勉強をした後に書いた詩(左)がモチーフになっています。宮越さんは、この詩を書いた4か月後に11歳で、短い生涯を閉じました。

その後、様々な経緯があって、この原詩が日本全国で歌われる合唱曲となり、命の授業の教材としても脚光を浴びる事になりました。

未来ある貴重な命が失われ、ご両親の悲しみはずっと癒えることはないと思います。しかし、彼女の生きることへの希望と渴望は、すばらしい曲となり、歌い継がれ、授業での教材として、語り継がれています。

このように、曲には意味があり、その意味を深く考え、自分自身のクラスの歌う意味として捉え直すことができれば、さらに深みのある合唱として当日に披露できるのではないかと思います。

毎日、校長室の窓を開けると、皆さんのすばらしい歌声が聞こえます。「合唱の長町」の伝統が引き継がれているのを実感します。皆さんの心の中に、様々な思いが残る素晴らしい合唱コンクールになることを期待します。

